

春と埃

家のまはりに木立の多い、この上もなく閑静なのを好んでちやうど去年の春早くここに移つて来た。ちよつとした高臺で、その先きは練兵場になつてゐるから、街が途切られてゐて、ふだんはこの近くの十軒位の家の人々の往來しかないわけである。東京の市内でこれほどひっそりしたところはまづ滅多にあるまいと思はれる。

「物騒ぢやありませんか。」と、よく人に聞かれるが、幸ひに二町ばかりも横へゆくと、警察官舎がたくさん並んでゐるから、よほど土地不案内の泥棒でもなければ、殊更にこんなところをうろつくこともあるまいと考へられる。下から坂を上つて來ると晝間でさへ人に出あふことは稀にしかない。

木立が多いだけに、春の新芽の萌える頃はなんとも美しい。家は狭いが、向ひ隣のすばらしく大きな別荘の庭には、數百年も経たらうと思はれる松やらその他の樹木が一杯に繁つてゐる。晴れた日の朝など小鳥が頻りにそこで囀る。それで私はすこしうれしくなつた。

だが、世のなかにはよいことばかりもないといふのは、多分本當である。花曇の春が過ぎると、とかく風が吹きすさぶものである。ひろい練兵場の一隅には多少の草生もあるが、大部分は裸の土なので、いくらか天氣續きの乾いた日に風が吹かうものなら、濛々と空いちめんに蒨みがかつた土埃が風に送られてこの邊一帶を襲ふとなると、それはみじめなものである。幾ら硝子窓をしつかりと閉めきつておいても、どこかの隙間から砂土がいつの間にか家中にはひつてくる。机の上から棚の隅までみんなざらざらになつてしまふ。私の家ではまだしも向ひの木立でそれをよほど防いでゐるものの、直接に埃を浴びる家などになると、疊の上に堆く積るさうである。

ふだんは散歩などに恰好なひろびろとした練兵場もこんな日には困つたものだと思ふのは自然の人情である。だが、考へてみれば、それも一年にせいぜい何度と數へるくらゐなことなのだから、災難日でもあきらめて我慢するより外はない。

それにつけても我々は埃のやうなものを無闇に邪魔にして厭がるけれども、自然にはやはりさういふものすらも無くてはならないのであらうと考へられる。第一、地上に埃がまるでなかつたなら、どんなにせいせいしてよいかと思ふ人もあるかも知れないが、もしさうであつたら、あの青空の美しさは大分失はれてしまふであらう。空が一面に明るいのは空氣中に塵埃の

まじつてゐるのが大いに役に立つてゐるからである。近頃成層圏まで飛んだアメリカの高空探検者の経験談によれば、さういふ場所では周囲の空は黒ずんだ紫色をしてゐていかにも無氣味に見えたとのことである。とかく人間の浅い思慮だけでは自然の妙を本當に奥深く解するに至らないのが普通である。

地面から埃になつて立ち上るのは大體は動植物を通じて我々を養つてくれる土壤の小さな粒にちがひないのだから、元來、人間がそれを毛嫌ひするといふのはをかしい。もつとも有害なバクテリアなどが埃と一しよに運ばれることなどは餘り感心しないけれども、埃がなくてもバクテリアは散らばるとすれば、それを埃の罪にのみ歸するわけにもゆくまい。反對に土にしろなんにしるいつも大きな一塊りになつてゐないで、埃のやうな小さな粒になるからこそ、そこに自然のあらゆる複雑さといひ知れぬ妙味とが生れてくるのである。近ごろでは都會の鋪道がコンクリイトやアスファルトで固められて綺麗にはなつたが、そんな道ばかり歩いてゐると時には生な軟かい土を踏むことがひどく懐かしまれる。それと同じやうに、まるで埃のない硝子張りの透きとほつた世界にでも佳んでゐたら、かへつてちつとはそれをぼやかしてくれる埃が欲しくなるかも知れない。

社會のなかでも餘り立派な人間や偉い大ものばかりだつたら、世の中がひどく難かしくなつてとても平和にうまくゆかないことになりはしないだらうか。して見ると、平凡な埃のやうな人間もやつぱり必要になつてくるし、さういふのがかへつて實に愛らしくもなるのである。さう思ひながら私は春の埃を眺めてゐると、實におもしろい感じがする。ひどく風が吹くと、その埃がやたらに空に舞ひ上がつて、世の中がなんとも騒がしくなるけれど、それも一度しつとりとした春雨に遇ふとやがて靜かに落ちついてしまふ。埃が立つといつたつて、本當は埃がわりののか、それを吹きまくる風がわるいのか、どちらかわからないのではないか。そして雨に濡れると土埃がちつとかたまるといふことでさへも考へて見るなら、それも自然の意味ぶかい一つのはたらきなのである。

*昭和十一年四月二十六日の『週刊朝日』より。この家は上目黒のもと東山と稱する高臺にあつて、駒澤練兵場に接した處である。